

## 審査の結果の要旨

論文名：スペイン十世紀レオン王国の建築と社会  
モサラベ史観批判およびイスラム建築の影響の再検討を中心に

氏名 伊藤 喜彦

本論文は、初期中世スペインがもつ文化的フロンティア性とその建築における表出を分析することで、西洋建築史がこれまで枝葉として目をつぶってきたスペイン建築に存在する驚くべき豊かさ・多様性を発見し、建築文化が接触・伝播・受容によってどのように変質し、特殊化するかという問題を考えるものである。

まず第一部では、スペイン初期中世キリスト教建築のヒストリオグラフィーを取り扱う。本論の大きな課題の一つが二十世紀初頭から現在まで主流であるモサラベ建築史観批判であることから、この史観がどのように支持され、どのような反駁を受けてきたかを記すことは重要である。こうした試みがこれまでないので、長年の論争の経緯と成果をまとめておくことも意義深い。第一章は1919年の『モサラベ教会堂』まで、第二章はそれ以降の西ゴート期、アストゥリアス王国期の建築研究史、第三章は批判的「モサラベ」建築研究史、第四章は西欧初期中世史の中のスペイン、第五章は近年の新しい動向について述べている。終章ではこうした研究史を踏まえ、本論での展開が述べられる。

第二部では、十世紀にイベリア半島北西部でアストゥリアス王国から発展したレオン王国（アストゥリアス＝レオン王国）の建築を取り巻く背景と状況を描写する。まずレオン王国誕生までとその瓦解について概観したあと、建築の影響関係の歴史的裏付けとしても重要な「無人化」「再入植」の問題についてまとめ、また、レオン王国におけるモサラベ移民の存在について、体系的批判を加えた。その後、レオン王国がどのような社会であったかを描写し、そうした社会における建築のあり方についてまとめなおした。とりわけ重要なのが第二章第二節で、レオン王国の主要公文書におけるアラビア語系人名の定量的分析

およびいくつかのケーススタディーを通じて、大量のモサラベ移民で構成されていたという通説を訂正した。

第三部では、十世紀レオン王国の建築を捉えるため、ヴォールト、アーチ、建設材料、建築を巡る言説に脚光を当て、第二部を踏まえながらも、より純粋な建築的問題としてそのあり方を再検討する。サンティアゴ・デ・ペニャルバの穹稜ドーム状ヴォールトの検討を通しては、そのイメージ・ソースが古代の浴場を転用したレオン大聖堂にあるのではないかという説を呈示し、ア・プリアリにイスラム建築の影響を強調する態度を批判した。また、同じく馬蹄型アーチの用いられ方についても、イスラム建築からキリスト教建築への影響が純粋に視覚的面にとどまっていることを指摘した。

第四部は、レオン王国十世紀を代表し、様々な共通点を持つ四つの建築、サンティアゴ・デ・ペニャルバ、サン・ミゲル・デ・エスカラーダ、サン・セブリアン・デ・マソーテ、サン・ミゲル・デ・セラノーバのそれぞれについて、これまでの研究成果をまとめるとともに、史料と実際の遺構の分析を通じて、建設フェーズと建設時期について改めて筆者の見解を述べた。

以上の検討を通じて、イベリア半島北西部、初期中世のより正確な像の構築を試みると共に、古代と中世、地中海、ヨーロッパ、そしてイスラムというより大きな問題系が、どのような関係性をそこに表出させているのかを明らかにした。以上は興味深い成果をもたらした西洋建築史研究であり、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。